

小説

彼岸花

ゆとり 満

その日は台風の影響か、朝から蒸し暑くどんよりとした日であった。午後になると天気は猫の目のように変わった。急にスコールのような雨が降り出したかと思うと二十分もしないうちに青空が顔を出し、回復したかなと安心する間もなくまた黒雲が空を覆い雨が降り出す。そんなことを幾度も繰り返した。

「まるでタイのような気候だ。これはスコールだ。日本もいよいよ熱帯になってしまったか」

宮城大介はそんなことをつぶやきながら仕事を後にした。幸い雨は上がっていた。しかし宮城は念のため、だれかが仕事場に置き忘れていったよれよれのビニール傘を手にかけていた。電車の中は夕方のラッシュでかなり込み、人

いきれと湿度の高さとがあいまって蒸し暑かった。バスに乗り継ぎ停留場に降りると近くの森に靄がかかっていた。体にねっとりまとわりついたじめじめした感覚をぬぐい去りたいと宮城は歩を速めた。

「あなた、携帯が鳴っているわ」
妻の静佳が叫んでいる。

シャワーを浴びている宮城にはよく聞き取れない。浴室の扉を半開きにして妻に聞き返す。スマートフォン受信音が鳴っていることを聞き取ると「上がったら掛け直すからそのままにしておいて」と返事をする。

シャワーを終えてタオルで頭髪を拭きながら宮城はスマートフォンをチェックすると、教え子だった浦上優二から

の着信であった。三日前に宮城の仕事場近くの寿司屋で一緒に食事をしたばかりであった。宮城はその時のお礼だろうと思いい、食事の後にでもゆっくりと掛け直そうとスマートフォンを閉じた。

浦上優二が宮城の勤務していた桜小學校に転校して来たのは優二が五年生の時であった。普段は転入生を担当が連れて来て校長に紹介するというとはなかった。しかし、優二の場合は別であった。担任の遠山潤は生真面目な顔を一層緊張させて校長室に入ってきた。その後ろには一年生担任の中村祥子がいた。中村は教員経験四年目の若手である。遠山が優二を、中村が花菜を宮城に紹介すると、二人を廊下で待つように指示した。そして、「校長先生にご相談したいことがあります」と、おもむろに口を開いた。中村も生真面目な表情を崩すことなく大きく頷いている。

驚いたことに優二は転入手続きに一人で来たのだ。正確に言うとも妹の花菜と一緒に来た。花菜は一年生でありながら兄とだけ来たのである。当然ながら転入関係の書類は持参していた。しかし、転入する児童が保護者なしで手続きに来たなどと言うことは前代未聞のことであった。母親はなぜか優二の二歳上の日向を連れて中学校に行ったのである、と優二は語ったという。事情として母親だけの人親家庭であることにあつたのかもしれない。

担任の遠山の相談は「転入を受理してよいのか」という

ことであった。書類が揃っていれば受け入れるのは当然のことであった。しかし、保護者との面談は必須である。宮城は「まず相手先校の担任に連絡をして事情を確かめるように、そして浦上の母親に連絡をして都合を付けて来校するよう伝えて」と遠山に指示した。程なくして遠山が再び校長室にきた。彼の話はさらに驚くような内容であった。

優二は確かに在籍しているがほとんど登校はしてなかったと言う。不登校だった訳ではない。妹の面倒を見るために登校をしていなかったというのである。兄がいたが、その兄は不良仲間と遊び歩き妹の面倒は全く見なかったと言うのである。しかも転校は既に三回であった。後で聞いたことであるが母親は優二に「今度の桜小學校には毎日通えるよ」と、言ったらしい。また、母親が優二と花菜の転入手続きに來ないで兄の転入手続きに行ったのは、兄の日向が手続きをせず途中で逃げ出すことを恐れたからであると言う。担任の遠山は「校長先生これは重荷ですね」と言い、中村は「校長先生どうしたらよろしいのでしょうか」と続けた。宮城も内心「厄介ごとが増えたな」とは思ったが、口には出さず「とにかく実情をしっかりと把握し、その後対処方法を皆さんで考えましょう。とにかく書類や手続きには問題がありませんので本校の児童として一応受け入れましょう。正式には母親と面談してからにいたしましょう。事務職にもそのように伝えておいてください」と答えた。

案の定、優二の学力は一年生の初期段階のものと云ってよかつた。かろうじて平仮名の読み書きと簡単な足し算、引き算が出来る程度であつた。一年生の花菜も入学以前の学力であつたが、担任の中村は授業の中で何とか個別指導を行いながら学力を付けて行こうという決意を宮城に伝えて来た。問題は優二であつた。彼の現状では国語や算数の授業は完全な「お客さん」になるのは必定であつた。宮城は教頭や教務主任と相談をした。個別的な学習支援についてであつた。教頭も教務主任も授業を持っており、その他にも独自の業務を抱えているので恒常的に優二の学習支援を行うことは困難であつた。結局校長の宮城が仕事の合間を縫って個別指導を行うこととなつた。このことは学校の運営がぎりぎりの教職員でなされている現状を如実に示していた。校長が児童の学習指導をするというのは美談である。しかし、このような美談がまかりとおる日本の教育の現状は必ずしも正常とは言えない。欧米の教育現場では考えられないことである。

優二は知的な遅れはなかつた。しかし、知的能力を伸ばす土台となる時期にほとんど知的な刺激や訓練を行つていなかったためか、学習の能力は極度に低下していた。言つて見れば何年も放置されたままの畑のようなものであつた。地面はかちかちに固まり、雑草がびっしりと生い茂つている状態である。彼の脳はこれと似たようなものであつた。

思う。三百ミリリットルのカンビール一缶で宮城はほろ酔いである。段々に億劫になつて行くのが分かつて来た。「あなたは幸せね。担任だつたらまだしも、校長だつたあなたに当時の在校生から電話がくるなんて普通ないわよ」「その子は事情があつて五年間ほとんど通学せず、従つて学力がほとんどなく校長室で学習支援をした子だつたのよ。だから他の子たちとは事情が違うという訳」「なるほど。でもその子幸せだつたわね。手厚い個別指導を受けて」

妻の静佳も小学校教員であつた。従つて小学校の内情とか子どもたちの抱えている問題などはよく承知していた。妻の言葉に宮城は「幸せだつたかどうかは分からないよ」と口から出かかつたが止めた。きつと話が長くなるに違ひなと思つたのである。ほんのりとアルコールに浸された脳は細かな説明など忌避するに違ひないと思つたからだ。

だるさを増した体をまるで持ち上げるように「よいしょ」と声を出して宮城は二回の書齋に向かつた。椅子に座るなりスマートフォンを取り出し優二の着信番号をクリックした。しばらく着信音が鳴つて、「はい」という声が聞こえた。「宮城だけど浦上君ね。さつき電話をもらったけど」

「あつ、先生。ちよつと困つたことが起きて」「どんなことよ」

従つてかけ算九九もいくら練習しても定着しないのである。覚えてたかなと思つても翌日になるときれいさっぱりと忘れていた。当初、宮城は彼の脳の現状への理解がなかつたものであるから、単に優二の努力や意欲の問題と決めつけてしまつて来た。従つて、覚えの悪いことや忘れてしまうことに対し大声で叱りつけることもままあつた。だが、どんなに叱られても優二は校長室へ嫌がらずに通ひ、一生懸命に学ぼうとしていた。ある日、優二が「僕の頭が悪くてすみません。でも、僕は毎日学校へ来られるようになったこととうれしいのです」と、しみじみと語りかけてきたことがあつた。宮城はこの言葉に胸を衝かれた。そして、自分の優二への理解のなさを痛感したのであつた。それを境に宮城の優二へ対する対応が一変した。怒ることはなくなり、粘り強く、しかも噛み砕くように丁寧に教えるようになった。このことが効を奏したのか優二の理解力も段々と高まつて行つた。宮城は教えることは力業ではないことを改めて知つた。学ぶ環境を整え、学ぶ者の心の状態を解きほぐすことが先決であることを教えられた。

「ねえ、さつきスマホの着信は誰だつたの」「ああ、桜小学校校長時代の教え子だよ。ちよつと事情があつた子でね。卒業してもう十年ほど経っているけどね」

宮城は妻に説明しながら、返信をしなければならぬ

宮城は瞬間お金のことかと思つた。

「ちよつとややこしいので電話ではなく直接会つてお話ししたいんですが。出来たら明後日の夕方五時頃がいいんですが」

宮城は優二が先日の食事の件には一言も触れることなく、その上一方的な言い方に気分を害した。しかし、努めて明るく

「ちよつと待つてよ。予定表を確認するから。五時半頃だつたら都合つくね。場所は」

「先日の寿司屋でいいです」

「寿司半藏ね」

「そうです」

よろしくと言うどころか、一方的に押しつけて来るような言い方に宮城もさすがにむつとした。先日の寿司屋での猫なで声で「せんせい、せんせい」と持ち上げるような言い方とは大違ひであつた。

「ところでこの間の寿司はどうだつたかね。花菜さんはだいぶ気に入つたみたいだつたけど」

宮城はわざとらしく言つた。言つた瞬間大人げないと悔やんだ。相手は二十歳ちよつと過ぎの若者である。言葉遣いは未熟であつてもしようがない。これから社会に揉まれて学んで行くはずである。年長者らしく寛大な気持ちを持つべきであると舌打ちをした。

「ええ、まあまでした」
 優二の応えにさすがに宮城も腹に据えかねてきた。まるで喧嘩を売って来ているようにも取れた。たった今の自責の念が吹き飛んでしまった。

「そうか。あまり口に合わなかったみたいだね。明後日の場所は替えたらどうかね」 宮城はほんの少し怒気を含めて言った。

「あつ、いいですよ、あそこで。駅近なので便利ですから。じゃ、明後日五時半半蔵で」

そう言うのと優二は一方的に電話を切った。
 宮城は酔いもすっかり醒めてしまった。優二の度重なる無礼な物言いに怒りがふつふつと湧いて来るのを覚えた。

「あんな無礼な言い方に我慢する必要はなかった。すぐに断ればよかったものを」と、自分をなじった。それにしても宮城は思った。あの態度はなかるうと。小学校時、それなりの熱意をもって懇切丁寧に教えた。それに応えるかのように感謝の気持ちをもいつも示していた優二であった。子どもと言え、その人柄に宮城は密かに尊敬の念さえ持っていたのである。純朴で謙虚、そして素直な人柄だった優二だからこそ小学校卒業以来の出会いであったが、すぐに会うことを承諾したのだった。宮城はひどく裏切られた思いに駆られるのであった。あるいは、とも思った。宮城の気が付かないところで傷つけてしまったのかとも思う。し

かし、終始和やかに過ごし、別れ際に優二は、宮城の手を両手で強く握りしめ感謝の気持ちを過大なほど述べた。妹の花菜もあふれるような笑顔で感謝の言葉を述べ、あまつさえ宮城の体を抱きしめ別れを惜しんだほどであった。やはり、と宮城は思った。きつとお金の無心に違いないだろうと。だからこそ逆に強い態度に出たのだろうと。宮城は先ほどの怒りや不審な気持ちが氷解して行くようだった。

「やはりそれに違いない。気の毒な境遇が続いていたからな。しかし、お金の無心には応えてはならないぞ」と気持ちを引き締めるようにその言葉を口にした。

宮城は教員を退職後、カラベ鉄道さくら駅近くに学習支援を主目的とした事務所を開設した。現在には不登校や学習遅進児たち総勢十人程が学習支援を受けに通っている。その他保護者の子育てや教育相談も行っている。また、近くの短大に週一回非常勤講師として通っている。物事というものはいったん動き始めると、仕事量は増えることはあっても減ると言うことはない。あたかもその仕事で人格を持つて宮城の場合もそうである。傍からは退職後の気ままな片手間仕事のように見られ、よく「幸せな第二の人生ですね」とか、「好きなことをやって過ごせるうらやましい余生」とか言われている。しかし、実際は現職の時と同じように雑事や授業の準備などに追われる多忙の日々となっているのだった。

事務所は友人の広田洋一の所有ビルの五階の一室である。広田が無料で提供してくれたものである。広田は宮城が桜小学校の校長の折に、PTA会長をしていた。広田の年齢は宮城のちょうど一回り下であった。その年齢差にもかかわらず何かと気が合い親交が深めていた。広田の本業は不動産業である。不動産の売買、その他に数カ所にビルやアパートを所有し、その賃貸も行っていた。全て自社所有のものばかりであったので極めて安定した業績を残していた。宮城が定年退職を一年後に控えた時のことであった。広田が「先生、退職後はどんなことをする予定ですか」と尋ねてきた。宮城は、不登校や学力遅進の子どものための支援の教室を開きたいという話をした。それは宮城が現職の頃から温めていた計画であった。その時、広田は「それならうちのビルの五階を使ってくださいよ。どうせ借り手はなく空いているのですから」と、いとも簡単に言うのであった。「駅近の便利なところですから家賃は結構するんでしょう。ボランティアでやりたいんで家賃は無理と思うんですよ」と答えた。すると広田は「なあにただで結構ですよ」と軽く言うのであった。元々広田は度量の広いところがあった。折に触れてのPTA役員の懇親会や行事後の懇親会などでは無造作に大枚をはたいて驚かせることが度々であった。しかも会議や行事計画などに対しては余計な口を挟まない。それどころか副会長以下に任せつきりであった。任せつき

りであるとそれはそれで無責任の謗りを受けるのだが、広田の場合はその人柄のせいかな非難めいたことは一切なかった。そんなこともあって他のPTA役員からは絶大な信頼があった。その上、学校の行事や運営などには批判などは一つもなかった。むしろいつも協力的であった。こんなわけでPTAと学校は蜜月の関係といってもよく、他の学校からは羨ましがられるほどであった。従って宮城の学校経営にも大きなプラスであった。ただ何事も針小棒大に言う癖があった。さらに隠し事が出来ず、内緒事の相談は難しいところがあった。しかしそれも彼の愛すべき人柄と考えると何の障害にもならなかった。

宮城が退職一ヶ月程前に広田の会社の近くの行きつけの焼き鳥屋で飲んでみた。広田の勧めで始めたスキューバダイビングの話で盛り上がった。広田の妻はフィリピン人で、彼女の実家はセブ島にあった。そのセブ島はダイビングのポイントが至るところにあり、海水の透明度も高く、魚種も多いことで有名であった。そこをダイビング用のボートを借り切って一ヶ月ほどゆっくり滞在しようというのが広田の勧めであった。いかに退職後の話とはいえ、さすがに一ヶ月も家を空けることは不可能なことであった。ましてフィリピンに一ヶ月もの滞在を宮城の妻が許すはずもなかった。宮城はやんわりと「ちよっと検討しましょう」と答えた。広田は「そうですね」とすんなりと引つ込めてし

まった。広田の淡泊さでもあった。

実は、宮城は彼の念願であった学習支援のボランティア団体を立ち上げる計画を進行させていた。残された課題は事務所のことであった。以前この事務所借用について広田はいとも簡単に理解を示していた。しかし、宮城にすればいくら友人でも簡単に切り出せる話ではなかった。しかし、それを解決しなければそれ上計画が進行しないのである。宮城は飲みながら、且つ彼の俗人離れた海外スキューバの話に相槌を打ちながら事務所借用の話を切り出す機会を窺っていた。広田が折良くトイレに立ち上がった。宮城は手を拭き拭き椅子に戻った広田に「実は会長に相談がありました」と話し掛けた。宮城は広田のことをPTA会長時代の口癖のままに会長と呼び続けていたのだ。

「何ですか」

という広田の言葉に、宮城はさも言いにくそうに、

「実は退職したら不登校や学力遅進児の学習支援をしたいと計画を進めているんですよ」

「なるほど」

広田は全く関心を示さない。宮城は「これは脈が無いな、もしかしたら忘れてしまったのかな」と思い、話を切り出すのをためらった。しかし、駄目元と思い、

「以前にお願いしたと思うんですが、事務所設置の件です」

「あつ、そんなことがあったみたいですね」

広田はやはり忘れてしまったのだと宮城は思った。

「事務所をお借りできないかどうかと思ひまして」

「ああ、思い出しましたよ。いいですよ、使ってください」

「いいんですか。本当に大丈夫ですか」

宮城は喜びを押し隠しながら念を押した。

「いやあ、問題ないですよ。どうせ遊ばしている部屋ですから。先生に有効に使ってもらえれば部屋も僕もうれしいですよ」

広田はめずらしく洒落たことを言った。

「ところで家賃はいかほどで」

「先生はボランティアでやられるんですよ。それなら僕もボランティアですよ。気にしないで遠慮無く使ってください」

宮城は内心小躍りしたいほどのうれしさであった。いくら友人の関係とは言え、広田がいつも簡単に承諾を下すとは考えもしなかった。「多少考えさせてください」とか「父親にも相談をしないと」ぐらいいは言うはずと宮城は考えていた。宮城は広田の度量の広さと決断の早さに感動し、感謝した。この夜の酒は殊の外旨く、量も進んだ。

宮城が広田から事務所を借りるに至ったにはこのよう経緯があった。

宮城はあまり気の進まないままにさくら駅ビル三階にある「寿司屋半蔵」店に向かった。駅の時計はちょうど五時を示していた。約束の時間にはまだ間があった。「何も早く行って待つ必要はないな。むしろ少し待たせた方がいいかな」と宮城は思い、下の階の本屋に向かった。注文したい本のことを思い出し、いい機会だと思った。宮城の欲しい本はやはり在庫がなく注文をしなければならなかった。手続きを終え、書店の本棚や平積みの本を眺めているうちにあつという間に約束の五時半は過ぎていた。宮城はゆっくりと歩を進め五時四十分に入店した。店内に「いらっしやいませ」という大きな声が響いた。校長時代の教え子の石川が近づいて来て「先生、こんにちは。今日はお一人ですか」と笑顔を浮かべながら尋ねて来た。「待ち合わせなんだけど。浦上と言うけど来てるかな」と聞いた。「お見えになっておりません。開店してすぐですのでお客様は先生が初めてです」と石川は答えた。「それじゃ待たしてもらおう。奥の個室の方がいいな。多分私を含めて三人だと思う」。石川は「かしこまりました」と言いながら奥の部屋に案内した。部屋と言っても薄い板で簡単に仕切られているだけである。四人ずつのテーブルが二つ置いてある。いわゆる炬燵仕様になっている。足が伸ばせて楽である。それに他の客の視線を気にしなくてもよい利点があった。

宮城が席に着いて十分程経って優二が石川に案内されて入って来た。

「暑いですね。もう九月も半ば過ぎでしょう。天気がヤバイっすよ。ああ、俺生中ね。暑いので出来るだけ早くね。先生も同じでいいですね」

「ヤバイはお前だろう」と、宮城は叫びたくなった。人を誘って置いて遅刻はするし、挨拶もろくにしない。この男は一体何様のつもりだろう」と、さすがに宮城は気色ばんだ。

「料理は後で」という優二の言葉を聞いて石川は下がって行った。

「天気の話はいいとして、ところで話っているのは何なのだい」

宮城はむつとして言った。

「先生、話はまず一杯飲んでからにしましょう。今日はちよつとした力仕事をして来た帰りですので、喉がカラカラなんですよ」

そう言うと優二はおしぼりで顔から首、そして腕をこするように拭いた。おしぼりはたちまち黒く変色した。力仕事をして来たというのは本当のことようであった。

「この間聞かなかつたけど仕事は何をしているの」

「仕事ですか。なあにたいしたことはしていませんよ。まあ言ってみれば派遣業みたいなものですよ。いわゆる3K

と言われる仕事は結構人手不足なんです。いろいろ伝手を頼って3Kでもやれる男を捜し、3K会社に紹介しているんです」

「それはなかなか気骨の折れる仕事だね。じゃ、結構入りがいんじゃない」

「それが先生大変なんです。人の紹介と言っても、いわば商品みたなものです。例えば病気持ちとか、体力がない者、それと根性なしとか、こういうのを不良品と言っているんですが、この不良品は返品されちゃいます。その際、返品の手数料をこちらが払う仕組みになっているんです。ケースによってまちまちですが一人当たり平均三千円つてところですか。大きいですよ。とにかく一週間で基準ですから、この期間だけは辛抱させるんです。でもね、先生最近は本当に忍耐力のない奴が多くなって参ってますよ。もう少し忍耐力を付ける教育をしてください」

優二は能弁であった。こんなにおしゃべりな男とは宮城も思いもなかった。しかも「忍耐力を学校で身に付けて」などと言われるとは内心驚いてしまった。「やはり社会に出て採まれたせいなのか」と宮城は改めて優二の顔を見つめた。

「あっ、ビールが来ましたよ。まず、乾杯と行きましよう」

そう言うと優二はジョッキを持ち上げた。そして一気に不安な気持ちに襲われた。

「何もないけど。三人で結構楽しく過ごしたじゃないか。心当たりと言えばそれくらいだよ」

「先生、とぼけないでくださいよ。こっちはちゃんと証拠があるんですよ」

「おい、いい加減なことを言うんじゃないよ。それとも言いかかりを付けて脅そうというのか」

さすがに宮城は怒りを隠すことが出来なかった。

「だいたいね、先ほどから君の態度は何なんだよ。無礼と云うか、傲慢にも程があるじゃないか。卒業以来初めて出会って、君たちが元気に過ごしていると言うので私も心を動かされご馳走したんじゃないか。言いたくないけど、普通はそのお札を言うのが先だろう。それもなしに『心当たり』だの『とぼけないで』などの言い草はないだろう。それになんだ、『証拠』などは。まるで私が犯罪でも犯したようじゃないか」

宮城の怒りの言葉は止まることはない。

「『証拠』と言うんだったらどんなものかここで見せてもらおうじゃないか」

「先生がそこまで言うんだったら証拠をお見せいたしましよう」

そう言うと、優二はおもむろにスマートフォンを取り出すと画面を表示し、「先生これを見てください」と、差し

飲み干すと、プツプアーと息を吹き上げた。惚れ惚れするような飲みっぷりであった。その後ビールを追加し、さらにお任せ寿司やサラダなどを勝手に注文して行った。宮城はジョッキのビールをちびちびと舐めるように飲んだ。

「先生、どうしたんですか。もつとガンガンやってくださいよ。どうせ先生のおごりですから」

宮城は二の口が告げられなかった。そして、優二の狙いはこの「たかり」にあったのだと得心した。月に一回ほどならおごってもよいだろうと宮城は安堵した。飲んで食べたとしても一万円内で済む話である。宮城の住む社会とは別な社会を優二から聞くのも悪くないと思った。オーダーした寿司が出てき、ビールの空ジョッキもいくつか並んだ。宮城は再び優二に今日の本題について促した。

「実は」と、優二は一呼吸を置いて、「妹のことなんです」と、続けた。

「妹、花菜ちゃんのこと」

「花菜ちゃんがどうしたの」

「先日、先生にここでご馳走になったでしょう。その時のことですよ」

「その時何かあったの」

「先生、心当たりはありませんか」

「心当たり」

優二は変なことを言い出してきたなど、宮城は少しばか

出した。

宮城は差し出されたスマートフォンの画面を見た。そこには宮城と花菜が笑顔で並んでいる画面があった。久闊を交わす教師と教え子の麗しい写真と言えば全くその通りであった。

「この写真のどこが問題なのだ。えっ、一体」

「先生、よく見てください。先生が花菜の手を握っているんじゃないですか」

「手を握っている。そんなことはないだろう。むしろ花菜ちゃんが私の手を握っているんじゃないか。握っているというより私の手の甲に花菜ちゃんの手が置いてあるということじゃないか。どこが一体問題なんだ」

「先生、冗談も休み休みにしてくださいよ。二十歳そこそこの若い女性がなんで六十過ぎの年寄りの手を握りますか。商売女なら話は別ですよ。花菜は素人の女性ですよ。まだ男も知らない女です。そんな女が自ら進んで年寄りの手を好きこのんで握りますか。これはセクハラですよ」

宮城は、優二の「老人」とか「年寄り」という言い方に悪意を感じ、怒りがこみ上げてきた。そして、宮城は優二の真意がようやく理解できた。明らかに美人局であり、まんまと引っかけたかと思つた。同時に、なぜ自分が獲物としての対象にならなければならないのかと腹も立つのであった。優二が在学中は誠心誠意彼のために力を尽

くしたはずなのである。そんな自分を罫に嵌めて金をむしる取ろうという優二のさもしい根性が許せなかった。「セクハラと言うけど、見方によっては親しさを表現する行為と見られるじゃないか。まして、私はよこしまな気持ちなどこれっぽっちもないのだからね。君の言い方はどう見ても脅しだよ。出るどころに出たら君の方が恥をかいちゃうよ」

「先生も往生際が悪いですね。写真はこれだけではありませんよ。他に決定的なものがありますよ。ご覧になりますか」

優二は落ち着いて丁寧な言葉を使う。宮城は優二の言葉にはとどまった。確かに会計を済ませて店外に出た時花菜が宮城を抱きついて来た。

「先生、この写真をご覧になってください。アルコールで顔を赤くして、しかも鼻の下を長くした老人がいやらしく写っているでしょう。これを見ても心当たりがないとおっしゃるんですか」

優二はまたしても宮城のプライドを傷つけるような言葉を会話の中に入れてくる。優二は宮城の心をかき乱すために敢えて使っているのだらうと推測が出来た。ここでまともに怒りをぶっつけたら優二の思っ壺にだと、じつと我慢をした。

「君も見えていて分かっているはずだ。あの時は花菜ちゃん

から私の方に抱きついてきたのだよ。咄嗟のことで私には避けようがなかった。いや、避けたら彼女が自分を害すのではないかと黙って受け入れたんだ。それを君は悪意を持って私を脅しに掛けるなんてもつてのほかだよ。教えるとは言え許せないよ」

「何遍も言いますけど許せないのはこちらの方ですよ。何も大げさなことを言っているんじゃないんです」

「ところで花菜ちゃんはもうどうしているんだよ。これほどまでに君が言い張るなら花菜ちゃんの言い分も聞きたいよ」

「だから言ったでしょう。花菜は信頼していた先生にこんなセクハラをされてとてもショックを受けてるくに話も出来ない状態なんです。こんな状態で先生にあった途端、大声で喚かれたら困るのは先生でしょう。その辺のことも僕は配慮をしているつもりなんです」

優二は花菜を宮城には絶対に会わせない魂胆である。花菜は小学生の頃から無口な子で、教室でも陰のような存在の子であった。学習はやはり遅れがちで、それは学年が進行しても変わらなかった。どちらかと言うと次第に「お客さん」的存在になっていった。しかしながら、無口でいっつもにこにこしており性格はいたって穏やかであった。それだけに「花菜ちゃん、花菜ちゃん」とクラスの子たちには可愛がられていた。この寿司屋で会った時も小学校時代の印象と変わらないように宮城には思えた。それだけに優二が

言うような悪意を花菜が持つはずがないと宮城は考えるのである。たとえ幾ばくかの悪感情を持ったとしても、それは優二からの入れ知恵に違いないと宮城は確信した。宮城はこれ以上セクハラ問答を繰り返してもらいが明かないと思つた。

「ところで例えばだよ、いいか、ここが肝心なところだ。あくまで例えばの話だ。もし、私がセクハラをしたとしたら、私にどうしろって言うんだね」

「先生、例えばはありませんよ。事実です。あくまでも。花菜が泣いていることも含めてね。その前提を崩しては話が進みませんから」

優二はあくまでも強気であった。宮城は優二と話を進めれば進めるほど怒りが増し、同時に彼の執拗さに辟易してきた。

「分かった。だから私にどうしろと言うんだね」

「どうしろって言われるんですね。それは私から言えませんが。いやしくも校長先生をなさった方に高校もろくくすつぽ卒業をしていない私ごときが、こうしなさい、ああしなさいなどの指図は出来っこありません」

「しかし、確認だけど花菜ちゃんに迷惑を掛けたことへの償いをと言うことなんだろう。そうすると当然君の方に具体的な要求というものがあろう。これは一種の交渉ごとであるから、君の要求の味はつきりしないと交渉

の進展は望めないだろう」

「先生ちよつと、君、君と、さも私が加害者のように言っています、私はあくまでも仲介人ですからね。そこんところ誤解しないでください」

そう言うビルルのジョッキを傾け、一呼吸を置いて続けた。

「くだいようですが、もう一度申し上げます。先生のセクハラで花菜はとても悲しみ、そして傷ついています。尊敬していた校長先生がまさかこんなことをされるなんて思いもしなかったからです。良識ある先生ならそのところはよくご理解いただけます」

優二は、恐喝罪に問われるような言質がないように巧みに避けていると宮城には思えた。そのことは取りも直さず優二自身が己の罪を自覚していることの証左でもあると宮城は思うのだった。

「君は私が花菜ちゃんにセクハラ行為をしたという確信のもとに話をしているが、これは当事者同士が決めることではないよ。しかるべき第三者が裁定することだよ。この映像だつて見る人によって君の主張とは真逆に取れるからね。被害者であると言っている当の本人の花菜ちゃんの意見が聞けていないだろう。一方的に花菜ちゃんの兄である君の意見のみしか聞いていない。これでは君の話に簡単に傾けることは出来ないよ。こんなことは世の中の常識だよ」

宮城の理路整然とした話にさすがに優二は沈黙してしまつた。しかし、それも一瞬のことであつた。

「先生の言うことには確かに一理あります。でもね、例えセクハラでないとしても、元校長だった人が、教え子に抱きついたという噂がこの界限で広まつたらどうします。先生も知つての通り、人間ってこういう話が大好きですからね。ことの真偽なんてどうでもよくなるんですよ。話が十人目の人に伝わる頃には十倍にも百倍にも広がっていますよ。それもおもしろおかしくね。そこんとこを私は心配しているんですよ。先生には小学校の時ずいぶんお世話になりましたからね。そんな恩人の方が苦しんだり、悲しんだりすることは僕としても本意ではありませんから」

優二は今度は泣き落としにかかつて来た、と宮城は思つた。社会に出て揉まれずいふんと世知に長けて来たとも思つた。そして、話をすればするほど優二の魂胆は金であるということが明白になって来た。しかし、宮城は、こんな話に乗り易々と現金を渡すようなことをしてはならないぐらいは十二分に心得ていた。

「どうだ優二君、時間もだいぶ経っている。この話はお互いもう少し考えてからにしないか」
「考える時間を、ということですか」

「そうだよ。だいたい、私はまさかこんな話をいきなり聞くとは思ひもしなかつたからね。生真面目で誠実だった小

学校時代の君の印象をそのまま持ち続けて来たから。本音で言うとなんか驚いたし、残念だよ」

優二は、宮城のこの言葉に何も答えず、「分かりました。僕もしかるべき人にもう一度相談しますから」

優二は「しかるべき人に」と言つた時、頭を上げ鋭い視線を宮城に注いだ。そして、薄い笑いを浮かべた。

宮城は砂を噛んだような気持ちで帰宅した。飼犬に噛まれたような思いでもあつた。宮城には優二や妹の花菜に對しずいぶんと好意を持つて接したつもりでもあつた。特に優二には彼の学習の遅れに對し、無理にでも時間を取り、誠意を持つて教えたのもりであつた。彼が六年の途中から転校した後も、時折思い出し心配していた。だからこそ彼との再会を喜び、食事もご馳走してやつたのであつた。

一方、宮城は「だが」とも思うのである。小学校で別れて以来九年の歳月が経っている。優二は児童保護施設で高校卒業まで過ごしたはずである。卒業と同時に施設を出て社会人として暮らして来た。宮城が、想像する以上の辛さを体験して来たに違いない。その中で騙したり騙されたり、百円の金にも困るような生活があつたかもしれない。そんな優二から見たら、宮城は苦勞を知らない甘い男に見え、金を引き出せる男に見えたかもしれない。しかし、と宮城は思う。彼の元教師として、また社会人として毅然として

彼に對峙して行かなければならないと。それが結局優二のためにもなるはずだと。

それにしても誰に相談すべきかと宮城は思索した。家のドアを開けながら「ただいま」と奥に声を掛ける。妻が「あら、早かつたのね」と言いながら出てきた。「広田さんから電話があつたわよ。今日は遅くなりますと答えたら分かりました、と切つたけど」

「ああ、分かつた。ありがとう」と宮城は答えた。

「どうしてスマホに電話しなかつたのかな」と思いながらスマートフォンに着信を確かめた。確かに着信があつた。実は、宮城は優二との話し合いの前にマナーモードにしていたのであつた。それをすっかり忘れていたのだ。そしてこの頃物忘れが激しくなつて来たように思つた。そんなことを思いながら「そうだ、相談には広田が持つて来い」だと自然に笑みがこぼれてきた。膝を叩きたいとはこのことだと次に苦笑に変わった。そして「灯台下暮らしとはこのことだ」と内心思いながら、少し気持ちが軽くなつた。

「先生それは完璧な脅しですよ。言つちや悪いですけど先生を押し易いと見たんですよ。まあ、騙すより騙される方がよいつて世間では言いますけどね。ましてや先生は元校長という立場で、他の人に比べれば余計に世間体を気にする訳ですよ。相手に非がある場合でも内緒事で済ましがち

ですから。それだけに、こういう立場の人は彼みたいな者からは格好のターゲットになるんですよ」

さすがに広田はその仕事柄幾度も修羅場をくぐり抜けて来ただけはあつた。核心をすぐ見抜いたのである。

「どうしたらいいでしょうか」

「絶対に金を渡しては駄目です。びた一文もね。少しでも金を渡したら相手は図に乗つて要求を吊り上げて来るか、格好の獲物として離さないかですよ」

「やつぱりそうですね。私もそう思っているんですけど、相手が教え子でしょう。穏便に済ませたいんですよ」

「先生ね。こういうことは穏便には行かないんですよ、金を払うか拒否するか二者択一です。今回の場合は火種を残さずきつちりと片を付けないといけませんよ」

「そうするとどうなりますかね」

宮城は心許なさそうに広田を見る。宮城は遙かに広田より年上であるが、教員一筋の宮城と危ない橋を幾度も渡りながら商売をしてきた人生経験の差がどうしても出てきてしまふ。人間四十を過ぎると年齢などは関係なくなる。人生で獲得し、磨き抜いてきた度量や判断力が物言うし、人間の大きさを決める。

「当時、先生と教え子の兄妹二人の計三人でしたね。その他に第三者はいなかつた訳ですよ」

「そう、三人だけでした。他に誰もいなかったです」

「ということ、客観的な事実を証明する人間はおらず、写真だけが物証としてあるということですね。先生の話によると、その写真では先生が抱きついているとか手を握っているなどには見えないということですね。しかし、これは現物を見ないとほんととも言えませんからこの際置いておきましょう。まあ、私のささやかな経験から見ても脅しという面が強いようですね。いわば当たり屋に当たってしまったということですかね。こういう輩は過去に何回か同様なことをやっています。ですから、この男のことをちよつと調べてみる必要がありますね。取り敢えず住所です。出来たら職業もですね。あつ人材派遣業ですか。しかし、これは怪しいですね。二十歳そこそこでこの仕事をやっているなんてあまり考えられませんね。使い走りと考えればアリですけど。いずれにしてもまず住所ですね。それが分かれば次の手が打てますから」

広田の話を受けて宮城は行動を開始した。しかし、電話で優二の住所を聞いても優二は怪しんで簡単に教えてはくれないのではないかと宮城は思った。しかしながら、他に手段を思いつかない。やはり直接優二に尋ねる他はないと思った。宮城はどういう口実にしうかと思索を重ねた。彼は取り敢えず当面の問題には触れず、山梨の友人から葡萄がたくさん送られてきたのでお裾分けしたい、という理由にしようと思いついた。山梨の友人から贈られて来たの

は事実であった。宮城は自分ながらにうまい考えたと思わずにやりとした。

宮城は優二に電話を掛けた。優二はセクハラ問題の件だろうと思つたではない。しかし、宮城はその話は一言も持ち出さず「迷惑を掛けていたので山梨から産地直送で甘い葡萄を贈りたい」とだけ伝えた。どうやらこの言葉に優二は心動かされたようだった。「先生、例の件についての回答は早くお願いしますよ」と言いながら簡単に住所を教えてくれたのであった。あまりに呆気なくことが済んだものだから宮城はいささか拍子抜けの感がした。早速広田に優二の住所を連絡をした。

広田の住まいは稲市であった。稲市は東京都心から私鉄の急行で一時間、十分な通勤圏内であった。それに加え、JR線にも接続してターミナル駅として近年急速な発展をしている。広田は、珍しく仕事で忙しいので二、三日後に連絡すると返答があった。「珍しく」とは広田自身の言葉であった。「本人も結構ヒマしているのを自覚しているんだ」と思うと宮城は思わず苦笑いをした。

三日後、広田から宮城に「会いましょう」という電話があった。せつかな広田の面目躍如である。どうやら迅速に動いてよい情報を掴んだらしいのである。

「先生、すごい情報を得ましたよ」
開口一番、広田は笑みを「浮かべながら言った。

「えつ、すごいってどんな情報ですか」
間一髪、宮城も応える。

「それがね先生、驚かないでくださいよ。奴、生保受給者だったんですよ、二十一歳で。ふざけた野郎ですね。これだけでも許せないですよ。とつちめてやらなきや」

広田は日頃から生活保護の不正受給者については腹を立てていた。

「まさか生活保護の受給者とは、私も信じられないですよ。だって見た感じは心身共に健康そうで、自分でも働いていると言っていましたから」

「そこですよ、問題は。先生みたいにまじめで善良な人には分からないでしょうが、私みたいに不動産業で手広く仕事をしていると、人間の裏の汚い面は飽きるほど見ていますからね。病气やけがで仕事を失い収入がないということで、簡単に受給申請をする輩が多いんですよ。特に精神疾患は外から分かりませんが医者からの判断一つです。本人が鬱病みたいと訴えれば、医師はその線で診察を進めますから。なあにこの手の輩はこういうことはよく勉強していませんからね。鬱病の症状は全て頭の中に入っています。医師も患者の訴えをむげに退ける訳には行きません。行政は書類さえ揃っていれば受理せざるを得ない。今はこんな状況でしょう。社会保障費なんていくらあっても足りないのは当然ですよ」

「すると優二、浦上のことですが、彼は仮病を使って生活保護の受給申請をしたということですか」

「いや、それは不確かですが、不正申請で生活保護費を受給していたとすると、当然これは詐欺罪に当たります。万に一つ不正でなくともあの若さでしょう、就労活動をきちんとやっているかどうかですよ。最近、不正受給者への風当たりは強くなっています。自治体によっては審査や指導が甘いところがあるらしいんです。浦上がその辺を付けて受給している可能性もあります。とにかくこの点が彼の弱点であるのは間違いないです。もう少し彼の身辺を調べてみる必要がありますね。もしかしたらもつと彼の弱点がみつかるかもしれませんよ」

不正受給に腹を立てているだけに広田は生活保護についてはなかなか詳しい。

「取り敢えずどうしましょうか」

宮城は思案顔で広田に尋ねる。「そうですね、一度浦上の住まいを訪ねてみますか。どんな生活をしているかぐらいは把握しておいた方がよいのではないかと思います。今後の彼との交渉にも役立つかもしれませんから」

広田はまるで年下の者に教えるように懇切丁寧である。
「いつがよいでしょうか」

「善は急げと言うでしょう、出来たら今日でしょう。幸い住所は分かっていますからすぐ探せますよ。先生のご都合

は大丈夫ですか」

主客転倒である。普段から広田は行動的で、労を惜しまないところがあつた。また、好奇心が非常に強いところもある。今や宮城の問題をあたかも自分の問題であるかのよう捉えてしまっているのだ。宮城としては願ってもないことであつた。

「私は全く支障がありません。それより広田さんはよろしいんですか。会社の方の仕事もあるんでしょうから」

「なあと会社の仕事は社員に任せておけばいいんです。たいた内容の業務をやっている訳ではありませんから。どうしても言う時はスマホに連絡が入りますから」

「申し訳ありません。それではよろしくお願いします」

宮城は広田の運転する車で優二の住まいへと向かつた。今年台風の当たり年で、既に三つの台風が上陸している。九州に上陸したものが本州にはたいした被害をもたらさなかつたが、しかし北海道や北日本には大きな被害をもたらした。その後も台風の発生は続いている。その影響で澄んだ秋空が少しも現れない。この日もどんよりとした厚い雲が空を覆っていた。「こんなどんよりとした天気が続くと気分もすつきりしませんね。ところで最近の稲市の発展はすごいですよ。地価も相当上がっています。稲駅から徒歩二十分圏内のマンションは即完売ですよ。それに比べるとさくら市はあんまり土地が動いていないですよ。アパー

トの賃貸の手数は微々たるものですが、これで社員

の給料をまかなうなんてとても出来ない相談です。やはり不動産は物件の売買が本命です。自社物件の売買が一番利幅がありますけどリスクもありますから。銀行の融資を抱えたまま売れないと、どうしても値下げをせざるを得ないでしょう。場合によっては利益を度外視せざるを得ない時もありますから。バブルの時のように黙っていても右から左へと売れる時代はとつとに過ぎましたから。あの時代は本当によかつたですよ。おっと、話が逸れちゃいましたね。浦上の家は稲駅から結構離れていますね。枝番号があるのでアパートと思うんですが。なんか段々と畑が増えてきましたね」

広田が言うように密集した家並みしばらく続くと、畑や林、それに小川などの風景が見られるようになった。開発以前の風景が垣間見ることが出来る。開発に取り残されたのだろうか、所々に雑草地が広がっている。その雑草地の一つのところに赤い塊がいくつか見える。

「あの赤い塊のように見えるのは何でしょうかね。花ですか」

「広田さん、あれは彼岸花という花ですよ。マンジュシャゲとも言います。鮮やかな朱の色がこの時期に一番目立つ花ですよ」

「先生は花も詳しいんですね」

「子どもの頃はよく見ましたからね。懐かしいですよ。目立つてとても美しいんですが墓地によく咲いていたせいか僕らはこの花を嫌っていましたね。土葬された人のエキスを吸っているから赤い花が咲くんだけ噂し合っていましたよ。まともに考えれば全く得ない事なんです。しかし子どもたちはたわいもなく信じていたんですね。ですからどちらかと言うと憎んでいたという方が適切でしたね。見つけるとへし折っていましたよ。今となつてはひどいことをしたと後悔していますが」

「へえ、花にも憎まれるものがあつたんですね。見かけによらず、という言葉がありますが、人ばかりでなく花にもあるんですね。憎まれものが。勉強になりましたよ。しかし、この辺はまだまだ自然が豊かですね。緑を見るとほっとしますね。やはり人間には緑が必要なかもしれませんね」

「広田さんがおっしゃるとおりですよ。駅周辺のビルの林立に比べると、緑が残るこの辺りは住環境としては遙かにいいですね。駅に行くには徒歩では無理でしょうけど。バスを利用すれば渋滞時間帯以外は二十分圏内でしょう。稲市は発展の余地はまだ十分にありますがね」

「先生、ここが問題なんですよ。都市が成長するというのは人も物も時間も流入して来ると言うことなんです。流入してくる人間の中には人生の落伍者もいる訳です。簡単に

言うとホームレスのような人たちです。あるいはそれに近い人たちです。ホームレスの社会にもネットがあるんですよ。どこの市が判定基準が甘いとか、食物や安全な場所が手に入りやすいとかの情報が結構出回っているんですよ。生きるために彼らも情報には敏感にならざるを得ない訳です。彼らも情報からは逃げられないという訳です。そろそろ近いですね」

意外に早く優二が住むと思われる場所に来た。カーナビが「近くに来ましたので案内を終了します」とアナウンスした。

「どうもあの建物らしいですね」

広田が指指す方向に二階建ての建物が見えた。明るいくリーム色に塗られた壁が曇り日の中で引き立っている。

「アパートというよりなんか寮みたいな感じですね。午後の三時過ぎであまり人出はありませんが、降りてみますか」

と、宮城は広田に問いかける。辺りは住宅がぼつりぼつりと建っている。しかし、人通りは見かけない。午後三時をちよつと過ぎた時間であるが、静寂が流れている。

「ちよつと車の中で待ってみましょうか。あのアパートから出てきそうな感じがするんですよ。変にうるうるしていると警察に通報される恐れがあるんですよ。最近はこのような静かな住宅の住民は、とても警戒心が強くなつていま

すからね。誰もいないと思っても家の中からだれかがじつと我々を観察しているかもしれないから」

宮城は広田の言葉にまさかと思つた。しかし、考えてみれば領ける言葉であつた。宮城自身も三年ほど前は現職の小学校校長であつた。その折に何度も「知らない人にはついて行かない」とか「誘われても車には絶対に乗つてはいけない」と、朝会などで話したことが度々あつた。人間不信を否応なしに押しつけていた。こんな世の中であるから住民が見知らぬ訪問者に警戒を持つのは当たり前と言へば当たり前なのだつた。十分も待たないうちに一人の男がアパートの間から出てきた。広田の予感には正しかつた。右足を少し引きずっている。頭髪がぼさぼさとして、痩せていた。広田はドアを開けようと手を掛けながら「先生はここで少し待っていてください」と言つた。そして、外に出るとにこやかな笑顔をしながら男に近づいて行つた。二言三言話し掛けると男が笑つた。それに併せて広田も笑い声を上げた。広田はすぐに男の心を掴んだような気配だつた。そして宮城を手招きして呼んだ。宮城は緊張しながら広田に近づいた。

「こちら大学の先生の宮城先生です。ええとお宅さんは何さんでしたっけ」

広田はいかにも勿体を付けて宮城を大学の先生と紹介した。宮城は「アパートの短大の教員ですよ」と口の中で訂正

西は間髪を入れずに、
「それほど私は貴族なんてありませんよ。まるっきりの貧乏人ですよ」

そう言いながら安西はにこにことしている。地主に間違えられたことがよほどうれしかつたに違いないのである。虐げられている者ほど他人からのほめ言葉は身に沁みるものなのである。

「本当に失礼をしました」

と言いながら広田は煙草を取り出した。そして、「セブンスターですが一本どうですか」と言つて安西に差し出した。

「ありがとうございます」と言いながら安西は手に取つた。広田はライターで火を点けてやる。

「ちようどたばこが切れて買いに行くところだつたんですよ。本当にありがとうございます」

「安西さんの銘柄は」

「広田さんと同じです」

「セブンスターですね。ちよつと待ってください」

と言うと、広田は車に戻り、煙草を二箱持つて来た。

「お詫びです。取っておいてください」

と、言いながら遠慮する安西の手に煙草を押し込んだ。

「すみません、すみません」と、頭をぺこぺこさせながら安西は何度も礼を言つた。

をした。広田は男に圧力を掛けたのだ。男は目を大きくして宮城を見つめ、恐縮したように軽く頭を下げた。そして、釣られるようにして「安西です」と答えた。

広田の計略は凶星であつた。
「そうそう、安西さんでしたね。この頃物忘れが激しくて、いや生まれた時からでした。ごめんさいね。宮城先生が土地を探しているんですよ。この辺の静かな環境が気に入つたんですよ」

突然、宮城は土地を探しに来ていることになつてしまつた。さすがに宮城は広田の話を否定するほど愚かではなかつた。すぐに調子を合わせて行く。

「この辺も高いんですよ。僕らの給料じゃやっぱり手が出ないんだろうねえ」

宮城の話し掛けに、男はぼかんとしている。

「いやあ、実は安西さんを地主さんと間違えたんですよ。先生、先生だつて安西さんを見ましたら地主さんと同じに見えるでしょう。安西さんは貴禄があつていかにも地主さんっていう感じがすよね。ところがどうやら私の堪違ひだつたみたいで、謝つていたところなんです。それにしても安西さんは風格がありますよ。先生もそう思いますよ
ね」

見え透いた嘘もこうも堂々と言うと真実に聞こえるものである。さすがに安西は気恥ずかしく思つたのだろう。安

「安西さんはこの近くにお住まいですか」と宮城が尋ねると、安西は後ろを振り向きながらアパートを指差した。

「あそこのアパートですか。きれいで住み心地のよさそうなアパートですね。結構するんでしょう」

「家賃ですか。実はそうなんです。本当に高いんですよ。駅からも遠いくせに」

安西は「くせに」という言葉に力を込めた

「そうですね。実はですね。土地を探しながら人も探しているんですよ」

宮城は広田の話術の巧みに驚いた。話術というより相手の懐に飛び込む妙にある。宮城は別人を見るように広田を見た。安西が生保受給者の浦上が住むアパートから出てきたということは、安西自身も生保受給者である広田は既に見抜いていた。しかし、広田は絶妙に安西の自尊心感をくすぐりながら話を進めて来た。

「どんな人ですか」

安西は、さも興味あるように広田を見上げていた。安西は大柄な広田より十センチほど背が低い。

「浦上という若い男なんです」

その途端、安西の顔色が変わった。

「浦上優二でいいですか」

「ええ、そうです。よくご存じですね」

宮城は安西の顔色を窺うようにしながら答えた。

「すみませんが、浦上には関わりたくないんですよ」
安西は今までの柔和な表情を一変させ、険しい顔つきになつて言った。

「何か不都合でもあるんですか。安西さんにご迷惑をお掛けしたくないので無理は申しません」

「浦上はやはり評判が悪いようですね。予想したとおりでず。しかし、あんな奴をのさばらしておくのも腹が立ちますね」

「どうやら無駄骨でしたね。しかし、浦上をとちめるいいチャンスだったんですが、残念でしたね」

宮城も大きな声で応えた。

二人の会話を聞いていた安西の態度が変化して来た。先ほどの険しい表情が和らぎ、何か訴えたいような表情を見せてきた。その変化を広田は見逃さなかった。

「浦上には我々も困っているんですが、安西さんも何か迷惑を被っているじゃないですか。ご迷惑でしょうが、出来ましたら私たちの相談に乗っていただけませんか。勿論貴重なお時間をいただく訳ですからそれ相応のお礼はさせていただきますよ」

「まあ、今日は暇ですから。まあどっちでもいいですよ」

「どっちでもいい」というのは、安西の肯定の気持ちを婉曲に表現していることは二人にはすぐ理解できた。

「実は、私たちはお昼はまだ摂っていないんですよ。もし差し支えがなかった一緒にどうでしょうか。お願いしますよ」

「広田はいかにも相手の恩恵を願うかのようだった。」

「それほどにおっしゃるならお茶をご馳走になりますか」
「ありがとうございます。それでは申し訳ございませんがこの近くのファミレスにでも案内していただけますか」

「広田の懐柔策は見事に効を奏した。宮城は内心舌を巻いてしまった。仕事を通して身に付けたのか、はたまた天性のものか宮城には判断がつきようがなかったが、相手のプライドを傷つけず、なおかつ自分の欲する方向にもつていく話術は宮城も学ぶべきところがあった。反面、下手をすると騙しのテクニクにも通じる恐れを宮城は感じた。」

五分もしないうちに片側二車線の広い道路に出た。その道路に入ると、ものの二分も経たないうちに様々な種類のレストランが連なっていた。その一つのレストランの駐車場に広田は車を駐めた。車から降りると西の方に山々が連なっているのがぼんやりと見えた。

「今日は見えませんがここから富士山がきれいに見えるんですよ。富士山が見えないのに富士見町という町名を付けているところがありますが、ここは本当に富士山が見える

富士見町ですよ。一月頃の晴れた日にはぞくぞくするほどきれいな富士山が見えますよ」

安西はさも富士山を見ているように目を細め、西の方を指差した。よく手入れされた一面の畑が広がり、それほど高くない建物が点在していた。西の空にはどんよりとした雲が垂れていた。

「飲めるんでしょう。私は運転をしているから飲めませんが、お二人はどうぞ一杯やってくださいよ」

「喉も渴いていることだし、富士山の話も聞きたいので生中をもらいますか」

「広田に合わせるように宮城は応じた。」

最初は遠慮がちだった安西は二杯、三杯と重ねるごとに遠慮が消え、そして饒舌になって行った。安西はたやすく広田の自家薬籠中のものとなってしまった。広田の間に何でもしやべり、また、問われないことまで話した。

安西が出てきたアパートは、生活保護受給者たちが住む寮であつた。

「そうすると浦上もあの寮に住んでいるんですね」

宮城の問いに安西は「そうですね」といとも易々と答えた。宮城には予想もしていない展開だった。思わず宮城と広田は顔を見合わせた。

「だって彼は病氣もけがもない、いたって健康そうに見えますよ。しかも若いでしょう。信じられませんよ」

「なあに簡単ですよ。精神疾患っていうことですよ。心の病は外からは判断が付きませんから、本人が鬱だと言いやれば医者も否定できませんから。しかし、ワルガミもいい玉ですよ。あつ、ワルガミね、うらがみの浦を悪人の悪に言い換えて言っているんですよ。うちらは」

「と言うことは、浦上はみんなから嫌われているということですか」

「広田はさも納得したように大きく頷きながら話を続けた。
「あいつはワルですよ。寮長やオーナーのパシリをやっているうちらをくいものにしてるんですよ」

「くいものですか」

「そう、くいものです。簡単に言うとホームレス狩りをやっているんですよ。うちらの寮の部屋が空くでしょう、そうするとワルガミが入寮者を探して来るんですよ。その対象者はホームレスです」

「しかし、それほど大きくもないこの町にホームレスの人がそれほどいるとは思えませんけど」

「広田さん、失礼ですけどそこは素人さんが考えることです。何もこの町と限定していませんよ。横浜や川崎など大きな街に行けば対象者はいくらでもいますから」

「だけど、市外者は受給者にはなれないでしょう」

「すみません、広田さん。そこもうまいことやれるんですよ。市内で見つけたことにすれば簡単ですから。それは広

田さんみたいな話術ですよ。うまいこと丸め込んでワルガミの言うとおりにさせるんですよ。とにかく受給資格にはまず第一に居住地が必要ですから、それでうちの寮を紹介する訳です。紹介って言えばきれいですが、問答無用です。断れば話は打ち切りです」

「そこまで言う」とちよつとすみません」と言つて安西がトイレに立った。

「先生、すごい収穫ですね。一応浦上が生保受給者だと言うことは擱んでおりましたが、これではつきりしましたね。やつぱり奴は食わせ者だということがはつきりしましたよ。先生は絶対に奴の話には乗らず、ましてや金など払っちゃいけませんよ」

「それにもまして違法行為までやっていると言うじゃないですか。浦上にとってはこのことが役所になればたら大変なことになりますよ。私を脅している場合じゃありません。ところでこれからどんなことを安西さんから聞き出して行きますでしょうか」

「そうですね、この際だからホームレスがどうやって受給者に仕立て上げられて行くか、また寮の内部事情なんかも聞き出した方がいいですね。こんな絶好の機会はないでしょうから。帰りに三千円も包んでやったらいいと思いますよ。彼らにも一番大事なのはお金ですからね。先生はどう思われますか」

「広田さんのおつしやる通りです。お金は私の方で用意しますから」

その時、手を揉み、少しばかり足下をふらつかせながら安西が戻つて来た。

「やあ、お二人さんにはすつかりご馳走になりました。そろそろお暇しないと」

「まあ、いいじゃないですか。私たちはまだ食事をしていませんから、その時間だけでも付き合ってくださいよ。そうですね、先生」

「そうですね、安西さん。折角知り合つたんじゃないですか、もう少し付き合ってくださいよ。帰りは送りますから。広田さんオッケーですよ」

「それは勿論ですよ。安心してください」

そんな勧めを待っていたかのように安西は「すみません、甘えついでに焼酎をいただいでいいですか」と二人の顔を交互に見た。

安西の生活保護支給額は十一万円であるという。その中から食事費三万円、住居費四万円が差し引かれる。水道、光熱費は別に支払うと手元には三万七千円ほどだが、最終的には二万円ほどである。食事は三食付けで、一食三百円である。食べても食べなくても全額支払うことになっている。洗濯、風呂、トイレは共同である。これらの清掃は当番制になっている。食堂での盛りつけ、片づけもそれぞれ

が行う。

生保受給者たちは得てして人間関係がうまく築けないという。従つて、寮内でのトラブルも結構多い。寮内で傷害事件や殺人事件が発生すると寮の評判を落とすばかりでなく、行政の支援ももらえなくなる。従つて、このような問題を起させないのが寮長の手腕にかかっている。しかしながら現実的にはいつも寮長が見張っていることは出来ない。どうしてもサポートをしてくれる人材が必要になってくる。その役目を浦上が担っているという訳である。他の住人にすれば、寮長は煙たい存在であり、搾取者にも見るその飼犬的な者が浦上である。住人のちよつとした不満や要求は権力のある寮長よりもその手下である浦上に向かわざるを得ない。まして、浦上は隠れた収入を得ている。

住人の不満、怒り、嫉妬が浦上に向かうのは当然であった。生活保護者あるいはその受給候補者を担当する地方の担当課は生活福祉課である。名称は市区町村によつて多少異なる。生活保護申請に当たつて一番厳しく審査されるのは申請者の資産状況である。銀行口座の残高、生命保険等の有無、土地家屋、自家用車等の有無も厳しく調査される。また、身内の扶養調査も行われる。これらの審査・調査等を行う担当がケースワーカーである。ここをクリアして生活保護係が担当となり、支給額が決定される。お金の支給の他、医療費が無料。さらに整体、整骨院への通院も回数

制限があるにしても認められている。確認のあることではないが、さらに大きな問題がある。それは受給者による薬の転売である。薬の中でも特に睡眠導入剤(睡眠薬)の需要が高い。受給者の中には睡眠薬が不要にも拘わらず複数の医院を巡り何かと口実を付け、また症状をつくり上げて睡眠薬を手に入れる。それを転売する訳である。転売できるということとは闇のルート、市場が形成されていることでもある。

行政の生活保護者支援は経済的な問題、健康の問題ばかりでなく就労支援も大きな目標になっている。そこを担当しているのが就労支援係である。ここはハローワークと常に密接な連絡を取り合っている。一人でも多く、そして少しでも早く就労させることは各自自治体の予算節約に直結する。しかし、現状は必ずしもそうになっているとは言えない状況がある。脅しや泣き落としには人間誰しも弱い。そういう弱さは職員にもありがちである。また、よく言われるお役所体質である。何事も事なかれ、安全、無難主義が運びっている構図は否定できない。

安西が入居している施設はNPO法人組織となっている。この組織は基本的に単年度決算で、しかも内部留保は認められていない。その代わり税法上の優遇措置がなされている。しかし、どのような組織にも抜け穴は存在する。生保受給者の寮もその例に漏れない。勿論健全な運営を行つて

いる施設は大部分である。安西の話によると彼の寮もかなりあくどいやり方をしてるらしい。例えば布団の購入である。入寮者がある度に布団の購入が認められている。しかし、現実には布団の耐久性は結構ある。新入寮者がある度に布団を購入する必要はない。しかし、安西の寮では購入していると言うのだ。とすると必ず布団は余ってくる計算である。その余った布団はどうなるかと言うと、それを購入する業者がいてそこに売却する訳である。勿論その収入は利益としては計上しない訳である。いわゆる隠し収入である。その他入所者たちが使うトイレトペーパー、洗剤、石鹸などの細々とした消耗品を市場価格より高い値段で設定して入所者から徴収している。この差額も寮経営者の懐に入る仕組みになっている。入所者たちは結局、ぎりぎりの生活を強いられる。彼らは搾り取られる、即ち被搾取者とも言える。貧困ビジネスと言われる所以である。ところで、底辺で生きている者たちの生活費の原資は税金である。結局、その税金が貧困ビジネスの経営者の懐に入ることになっている。貧困ビジネスを営む者たちを善良な市民の税金を通して支えているという構図なのである。

このような状況であるから、入寮者の大部分は不平、不満を持っている。本来なら入寮者たちが団結して待遇改善の要求などをして解決すべきである。しかし、彼らの大部分は事なかれ主義、長いものには巻かれるということが「全く広田さんと同じ意見です。感謝します。なお、浦上さんには今日お目にかかったことも、お話を伺ったことも内緒にしてください。安西さんにご迷惑をお掛けすると行けませんから。それとこれは広田さんと私からのほんの気持ちです。お受け取りください」

「いや、それは困りますよ。こんなにご馳走になっているんですからそれで十分ですよ」

「そう言いながらも安西の頬は緩んでいた。そして両手でそれを押し戴くようにして受け取った。

外に出ると雲に覆われている西の空が薄赤く染まっていた。襟足を当たる風がかすかに涼しさを含んでいた。宮城はやはり季節の移ろいは確かなものだと感じた。

「西の空が赤くなっていますから明日は晴れかもしれませんね」

「先生、本当ですか。とにかくこのねちっこくて湿気の多い天候が続いているでしょう。洗濯物の乾きが悪くてみんな困っているんですよ。晴れるといいなあ」

安西は赤い顔の頬を膨らませブワツと強く息を吐いた。そして宮城と広田に近寄り手を取ると何回も握手をした。宮城は荒れた安西の手が思いの外強い握力があることに驚いた。

「じゃあ車に乗ってください。寮まで送りますよ」

すっかり身に染みついてしまっていて、とても団結どころではない。陰で鬱憤を晴らすか愚痴を言うのがせいぜいである。しかし、中には声を出して抗議をする者もいる。こういう時には浦上の出番である。勿論暴力で解決などはせず、巧妙な嫌がらせ、時には不法な金銭要求などを仕組みそういう男を孤立させるのである。結局、多勢に無勢である、ほとんどの者が嫌気をさして他市に逃れて行く。他市に行ってもやはり生活保護の受給者になる。結局堂々巡りな訳である。退寮した者の補充は、浦上たちが市内や他市に出向いてその候補者を探してくるというシステムなのである。生活保護受給者を基軸にしてお金の循環システムがしっかりと確立をしているということである。

安西から概略こんな話を聞いて宮城も広田もさすがに目を合わせて大きな溜息を付けた。ある意味では二人にとって予想だにしない大きな収穫と言ってもよかった。特に宮城にとっては浦上の攻撃を交わすための貴重な知識と思われた。

安西は日頃の不満を一気に吐き出し、その上、好きなビールをたらふく飲み上機嫌であった。

「いやあ、安西さん貴重なお話を本当にありがとうございます。私には無縁な世界の話でしたが大変興味深く伺いました。これをご縁にお付き合いさせていただきます」

「そう言う手差し出し握手を交わした。」

広田が柔和な表情を出して安西に問いかけた。そして安西の肩を抱えながら「ワルガミの情報があつたらどんなことでも教えてください。悪いようにはしませんから」と言いながら名刺を渡した。安西は名刺をさも大事そうに持って「はい、分かりました。必ず連絡いたします」と答えた。その様子を見ながら宮城は「自分にはとても真似が出来ないことだ」と、感心した。

「実はね、稲市役所に知り合いがいてね。偶然君の名前が出てね、いろいろ事情を知ったんだよ。優二君も大変なんだね」

宮城は優二がテーブルに着くなり間髪を入れずに言った。広田と入念な打合せをした上のことだった。広田は「とにかく先手必勝で行ってください」と宮城にアドバイスをしてくれたのだ。勿論「稲市役所に知り合いがいる」というのも出任せであった。

「何のことですか」

優二は少しもりながら応えた。

「いや、別にたいしたことではないんだが、優二君生活保護を受給しているんだってね」

もし、優二が冷静だったら「そんな個人情報をどこから仕入れたんですか。もし、市役所の人間だったら情報漏洩で首もんでしょ」と逆襲してくるところだったが、優二は

宮城の予想通り、完全に恐慌状態に陥ってしまい、思考が停止してしまったのだ。そして、「仕方がありません。働けない精神状態なんですから」と答えるのが精一杯であった。

宮城は、優二の「働けない精神状態」という言葉を聞いた時「しめた」と思った。攻勢に転ずるきっかけができたと考えたからである。広田の狙い通りであった。

「生活保護の受給がいけないとは言ってはいいよ。最低の生活を保障して行くのは国の役割であるからね。若い優二君だって働けないということであれば何の遠慮もなく受給の申請をしても全く問題はないよ」

優二にも二十一歳という若さで、しかも虚偽の理由で受給している後ろめたさはあるようだった。宮城は、生保受給の話には深入りしないようにした。「個人情報漏洩問題」への進展を恐れたからであった。同時に気持ちに余裕ができたように思えた。

「それと君が住んでいる寮ね、そこで寮長の代理人みたいな仕事もしているんだって。君は昔からそうだったけど優秀だからね。そんな大事で神経を使う仕事もしっかりこなしているんだ」

優二はどきりとなった。まさかそこまで宮城が把握しているとは思ひもなかった。迂闊なことでは言えないと思った。二人の間に沈黙が続いた。その時宮城のスマートフォン

ンの着信音が鳴った。宮城は「ちよつと失礼するね」と優二に伝えると廊下に出た。広田からの優二に関する情報だった。

広田は安西からの情報であると前置きをして、話を始めた。それによると優二は他市の同業者であるスカウトとホームレスの獲得を巡ってトラブルになったと言う。その際に優二がある組織の名前を口走って相手を脅したというのである。不幸なことにそのことがその組織の構成員の耳に入ってしまったと言う。今のところ何の動きもないがただでは済まないだろうということであった。「優二の耳にも届いているの」と、尋ねると「それは、はっきりしていない」と言う。

宮城はそれを聞いて暗い気持ちになった。優二の軽はずみな言動が取り返しのできない結果をもたらそうとしているのである。優二が口にした組織の社会では面子というものを極めて大事にしている。こんなことは誰でも知っていることである。組織の名を騙るなどはその面子をつぶす典型的なことである。優二はどうやって解決を図ろうとするのだろうか。結局はお金か身体で贖うしかないだろうと宮城は思う。そうすれば余計に、しかも緊急にお金を必要とするに違いない。今日の優二の様子では自分の言動がまだ露見していることを優二は知らない、と宮城は判断した。宮城は優二との問題は今日中に決着を付けなければならな

いと思った。

広田との電話の間に、優二は態勢挽回を図ったようである。宮城が席に着くなり、

「先生、生保受給とセクハラ問題は関係ないですよ。生保の問題は僕個人の問題です。先生の妹に対するセクハラと切り離して話し合いますよ」

「優二君の言うとおりでだよ。生保受給のことで私は何も君のことを批判などしていないよ。しかし、収入を申告しないまま生保の受給をしていることが問題だと言っているんだよ。君の得ているお金は税金だからね。市民がそんなことをしたら黙ってはいないだろう。しかも、君が寮長とグルになつていてことまで知れ渡ったら寮のNPO団体の認可まで取り消されるよ。そういうことを私は心配していると言っただよ。あくまでも優二君のことを思っていることその辺はよく理解してほしいんだ」

「先生のご厚意は分かりました。でもね、妹の気持ちはどうなるんですか。先生という立場なら他人の気持ちを汲み取るということの大切さはよく分かるんじゃないですか。その辺のところはよく理解してほしい、という先生の言葉をそっくりお返ししますよ」

「そのことだよ。妹の花菜ちゃんの気持ちも知りたいんです。是非彼女に会わせてくれないかな。決して君のことを疑っている訳じゃないんだ。彼女を本当に傷つけているんなら

ら直接謝りたいんだよ」

「それは前にも言ったじゃありませんか。先生に会うこと自体、妹は怖がっているんです。会うことはとても無理ですよ」

「でもね、常識的に考えて被害者である人に一度も会わず、間接的に聞いた話だけで慰謝料とか迷惑料を支払うことはあり得ないだろう。私がいくらお人好しでもそこまで折れることは出来ないよ」

「じゃあ、あの写真を公にしているんですか。先生の今の立場も地位も失いますよ。それでいいんですか」

「優二君、それは立派な脅しだよ。録音しているからね。訂正はきかないよ」

「先生、それって汚いですよ。先生こそ脅迫じゃないですか」

「どちらが脅迫をしているのかは録音を聞いたら分かるはず。ここでもう一度聞いてみるか」

そう言う録音機をジャケットの内ポケットから取り出した。それは普段宮城が英会話練習用のために使っているものであった。

「やっぱ先生って汚いな。こうやって俺みたいな弱い者はいつも虐げられて来ているんだよな」

「虐げられているなんてどういうことよ。今だっけきちんと生活保護を受け何とか生活しているんだらう」

「それは表面上のこと。おいらたちのようにゴミみたいに底辺で生きている者たちはいつまで経っても浮かび上がれないのよ。小学校の時には先生にはすぐお世話になりました。お陰で何とか新聞ぐらいいは読めるようになったし、銭勘定も間違いない出来ようになりました。母親がバクられた時にも助けてもらいました。しかし、小学校も中学校もいじめられ通しだったんですよ。先生には分からなかったでしょう。それにパシリもさせられていたんですよ。辛い暴力はなかったんです。それは兄貴のお陰です。兄貴がヤンキーグループの一員だったからです」

宮城には初耳であった。まさか優二がはじめに遭っていたとは想像もしていなかった。彼の担任の遠山は指導力があり、子どもたちから信頼もあつた。彼の学級はいつも温かな空気が流れ、まとまりのあるクラスであった。

「遠山先生のクラスで」

と、宮城は思わず聞いてしまった。

「いや、遠山先生もクラスの人たちもよくしてくれました。他のクラスや先輩たちですよ」

「いやあ、そうだったのか、知らないでいて悪かったね」

「もう過ぎたことですからいいですよ。でも施設にいた時も辛かったですよ。とにかく規則が厳しくて。それに兄妹がばらばらになってしまったでしょう。寂しかったし、妹のこともとても心配でしたよ」

優二の話聞き、宮城は当時のことを鮮明に思い出した。

「校長、大変だ」

開け放しのドアと壁に両手を広げ情野天馬が叫んでいる。息も荒い。手で体の勢いを止め、校長室へ飛び込んで来ないのが天馬なりの矜持だったのかもしれない。十時二十分から始まる中休みの時間帯のことだった。

「おう、どうした」

それに呼応するように宮城も叫んだ。天馬は優二と同じ五年生、優二とはクラスが違っていたが、優二の最初の友人であった。天馬は学習が遅れ気味で時々喧嘩などの暴力沙汰を起こしている。いわゆる問題児であった。教師に叱られたり気に食わないことがあると学校を飛び出すのが常習で、担任を含め教師たちからの受けは芳しくなかった。

天馬は彼特有の嗅覚で優二に親しいものを感じたのかもしれない。天馬が積極的に優二に近づいて行き、何かと面倒を見ていたのであった。宮城は校長室のドアをいつも開けっ放しにしていた。休み時間には出来るだけ校庭に出て子どもたちと一緒に遊んでふれ合うようにしていた。宮城は出来るだけ天馬をドッチボールなどに誘うようにしていた。そんなことの積み重ねがあつたのか、天馬はよく校長室に顔を見せるようになった。

「優二の母ちゃんがバクられたんだよ」

変だったね。でもねあまり心配するんじゃないよ。取り敢えず座りなさい」と来客用のソファを勧めた。

日向の話によると早朝の七時頃、警察が事務所に「乱入」してきたと言う。そして母親と同居の男が逮捕された。さらに部屋がくまなく搜索され足の踏み場もない状態だったと言う。

「今、事務所って言ったよね。どこよ、そこは」と、宮城は日向に尋ねた。すると、どうやら工事現場にプレハブ小屋のようだった。男はそこで働く男たちの監督をしているようだった。さらに話を詰めて行くと住んでいたアパートからは半年前に引越していたのだ。そこは彼らの学区外にあたる。男は「普通の人でない」と日向は言った。どうやら麻薬の常習者だったようだ。日向の母親は男の愛人になり、やはり麻薬をやっていたのだと言う。幸い、子どもたちには何の被害がなかった。

「それにしてもその事務所から学校までどうやって通っていたんだ」

宮城は少し苦い顔をしながら日向に尋ねた。もう半年にもなるのに優二たちの転居の事実や家庭事情を全く把握していないことに忸怩たるものがあったからである。

「僕は自転車です。花菜を後ろに乗けて通っています」

「優二はどうして来ているんだ」

「はい、優二は歩いたり、走ったりです」

「えっ、」と、一瞬宮城は言葉を失った。そして、「どうして天馬はそれを知ったんだよ」

「優二のあんちゃんだよ」

「あんちゃん、あんちゃんはどこにいるんだ」

「下だよ」

天馬は事件の第一報をとにかく校長に知らせようと走ってきたのであろう。言葉もため口になっている。宮城が勤める学校は職員室や校長室の管理また児童や職員玄関は二階になっている。校長室の真下が校門から校庭に抜けるコンコースとなっている。天馬が言う下とはこのコンコースのことである。

「優二のあんちゃんの名前はなんて言ったっけ」

「ヒナタです」

「そうだったな。じゃ日向をすぐ連れて来いよ」

宮城も天馬に釣られて乱暴な口調になっていた。「それにしても」と、宮城は思う。天馬はずいぶんと日向と仲がよさそうだったと。類は類を呼ぶと言うが本当のことだと。天馬が日向を連れて来た。入り口で戸惑っている日向に「入れよ」と天馬が誘う。日向はおずおずと二三歩中に入った。躊躇している。誰も校長室には喜んではいらないものである。ましてや日向は宮城とは初対面である。「大丈夫だよ、心配するな」と天馬はすっかり先輩気取りである。宮城は立ち上がって日向の側に進んだ。そして、「大

宮城は天を仰ぎたくなる思いであった。兄が妹を荷台に乗せて自転車を踏み、弟は小走りについて小一時間も学校まで走る様子を思い浮かべると切なくなつた。なんとという健気なさだと思つた。それにしても子どもたちが本当に麻薬禍に見舞われていないのが心配でならなかつた。宮城は天馬に「下へ行って二人を呼んでおいで」と言つた。天馬は「よっしゃ」と言いながら駆けて行つた。「駆けるな」と言う宮城の言葉など届きようもなかつた。

通常なら学校に着くや否や教室に行つていたのだが、今日は優二も花菜も渋つていたと言う。そこへちょうど天馬が通りかかったのである。すっかり親しくなつていた日向は天馬に事情を話したのだ。お調子者の天馬は「校長に話してくるから待っている」と言い、校長室へ駆け込んだという次第だつた。

宮城は天馬が優二たちを呼びに行つてゐる間に、隣室の職員室へ行つて教頭と担任の遠山に事情を話した。二人とも驚き、呆れ、「なんて言う親だ」と言つた。宮城は二人を校長室に招き「もう少し事情を確かめよう」と言つた。天馬にはこのことは絶対に内緒にして教室へ戻るように伝えた。しかし、すぐに噂は広がるだらうと思つた。天馬の性格では一分たりとも持たないだらうと思つた。花菜に事情を聞くのはあまりに気の毒だつたので、優二から確認の意味も込めてもう一度尋ねた。天馬の言うことと大差はな

かつた。しかし大事なことが抜けていた。警察の婦人警官から学校へ行つて荷物を取り、すぐ戻るように言われたというのである。宮城も二人の教師も警察からの連絡があつてもよさそうだと思つた。しかし、今まで誰もこの情報を得てはいなかつた。中学生と小学生二人である。母親一人が保護者である。その保護者が逮捕されればこれは児童相談所の出番であるはずである。警察から連絡がなくても児童相談所からはいずれ何らかの連絡があるはずだ。宮城はその連絡が入つたらすぐに伝えるよう二人に話した。そして、当秘密事項にして三人以外には漏らさないことも確認した。取り敢えず、中学校の校長と教育委員会には報告しなければと思つた。また、日向に尋ねるとお金は一銭もないと言う。朝食もまだだと言う。宮城は食事代として三千円を与え「大事に使いなさい」と伝えた。また、万一のことも考え学校の電話番号をメモ書きにして持たせた。

その後、児童相談所から連絡が入り、三人の処遇が決まつた。どこの相談所も定員一杯で三人を引き取る余裕がなかつた。結局、三人はそれぞれ別々の相談所に引き取られて行つた。

「相談所や児童保護施設でも僕はいじめられたです。多分、兄貴や妹も同じだと思います。たいていの子は両親のどちらかか、あるいは二人とも亡くなるか、はたまた離婚で預けられるんですが僕たちは犯罪者の子なんです。何もしや

べらなくてもどこからか漏れちゃうんですよ。それで『犯罪者の子』つていぶんいじめられましたよ。いじめより辛いのは無視ですよ。施設や学校でも無視されると誰も助けてくれないんです。友達も欲しくても誰もなつてくれないんですよ。まるでゴミ扱いです。回りにたくさん人がいるのにいないと同じです。ひとりぼっちです。この辛さは経験した者でないと分かりません。先生のようにですよ、校長先生までやつた恵まれた人には尚更分からないと思いますよ」

宮城は優二の言うことに少しの反論も出来なかつた。優二たちが母親の逮捕という惨劇を目の当たりにしたことも、母親や男の勝手に通学に一時間もかかる離れた飯場小屋のようなどころに転居させられたことも知らなかつたのである。

「母親の犯罪は僕らには全く関係ありません。それにも拘わらず、ずうっと付きまとつて離れないんです。社会に出てからもそうですよ。ろくな仕事になんか就けません。同僚に家庭のことを尋ねられても何も話せません。いつ、どこから母のことがばれるか分かりやしませんからね。分かつたらそれでおしまいです。しゃべらなければしゃべらないで変人扱いでしょう。結局、自分の居場所がないんですよ。信頼できるの妹だけです。兄貴は昔から全く当てになりませんから」

宮城のセクハラ問題は二人の話題から消えてしまつたかのようにだつた。優二は今までの溜まりに溜つた鬱憤を吐き出すように宮城に話し続けた。それは話というより訴えに近いと宮城は捉えた。

「まあ、ビールを飲んだら。さつきから話し続けて喉が渇いたでしょう」

宮城の言葉に泡の消えかけたビールをゴクリゴクリと優二は飲み干した。

「先生はお金のない苦しみは経験したことがありますか」

「それはあるよ。今だつて苦しいよ」

「先生、先生の言っていることと僕の言っている苦しみの次元は全く違うと思いますよ。先生も知つてのように僕が初めて学校に通い出したのは五年生の時です。それまで何をしてきたかと言うと妹の世話や家事をやらされていたんですよ。とにかくしょっちゅう引越してすから。何ヶ月も同じところに住まないんです。その時は本当の父親がいたんですが、トンネル工事やダム工事の現場を転々としていたんです。父親が事故死してようやく賑やかな場所での生活をするようになったです。それが桜町ですよ。でも知つての通り悪い男に母親がつかまつてしまつて、転々生活に逆戻りですよ。父親がいた時には食うことには困りませんでした。死んでからです、苦しくなつたのは。こんなこと言うのは辛いんですが、僕の母親は男にだらしないんです

よ。とにかく男がいないと駄目なんです。後になつて気づいたんですが、父親が工事現場で事故死したので結構な見舞金や労災保証金をもらったはずですよ。しかし、母親はほとんど男に貢ぐかむしり取られたんですよ。家事もあんまり得意でなかったです。外に出歩くこと好きで、結局食事も掃除も洗濯もみんな僕の仕事です。兄貴は兄貴で暴走族仲間に入っていて頼りにならなかったです。母親は時々お金をくれますがそれでおかずがいつも買えるとは限りません。一円がない時だつてしょっちゅうありましたよ。いつか醤油を買いに行ったら本当に一円が足りなくて涙を流しながら家に帰ったことがありますよ。今だつて少しも贅沢なんかしていませんよ。とんかつやステーキを腹一杯食べたいなあとと思うこともあります。食べたらずいながなくなっちゃいます。たばこが買えません。これは内緒ですけど小遣いを少しでも多く貯めて妹に上げたいと思つています。妹も働いています。正社員ではありませんから生活ぎりぎりです。妹だけは何かまともな生活を送らせてあげたいと思つていますよ。今回の先生のセクハラに伴も妹に対してのことだけに許せないんですよ」

優二は再び「セクハラの件」を持ち出して来た。

「何回も言うだけで私にはセクハラをしたという覚えは全くないよ。君が証拠に挙げる映像にしてもどのようにも取れるものだろう。第一被害者である花菜ちゃんに会わ

せようとしなことが君の弱みを暗示しているんじゃないか」

「先生、何回も同じことを言わないでくださいよ。本人は会いたくないと言っているし、被害を受けたとも言っているんですよ。その交渉は兄である僕に一任しているんです。何らかの誠意を示してもらわないと我々は引き下がれませぬ」

「それなら聞くが誠意って何だよ。はっきり言ってもらおうじゃないか」

「だからそれは先生が示すことですよ」

優二の真意は明確であった。しかし、ここで宮城が折れて幾ばくかの金額を示したところで承知はしないだろう。また、一度では済まないことも十分に考えられる。このことは広田からも念を押されていた。

「はつきり言おう。私は君に一円たりとも払う意思はないよ。もし、それで不満ならその写真なり何なりをどうにでもするんだね。ただし、こちらにもそれ相応の対処をするから覚悟はするんだね。前回同様、今日も録音しているからね」

「先生、どうしても駄目だつて言うんですね。じゃ、本当にこの写真を流しますよ」

「分かった。まあ、かつての教え子だから一つだけ言つて

おくれ。君の生活保護費の受給ね、違反だよ。福祉課に通報したら直ちに調査が入り、君は最低でも虚偽で受給した金額を返済しなくちゃならないよ。勿論臨時収入の件もあるしね」

宮城は組織の名を騙り入寮者をスカウトしていた件で、その組織の者が優二を探していることは伏せた。いずれすぐ分かることでもあり、恐怖の時間は少ない方がいいだろうと考えたからだった。

「先生、どうしても駄目ですか」

優二は少しの間を置いて苦い表情で問うた。

「なんとしても駄目だね」

宮城はきつぱりと答えた。優二は苦い顔のまましばらく考えていた。そして顔を上げると、

「先生、何とか助けてください。今までのことは謝ります。少しいいんです。お金を貸してください。五万円でもいいんです。必ず返しますから」

と懇願してきた。

宮城は気持ち動いた。五万円ほどなら上げてもいいかなと思つた。これで喉の奥に刺さつた腹立だしいトゲが取れるなら安いものだと考えた。それに貧しい兄妹たちが多少でも潤えるなら宮城の良心も満たされると思つた。しかし、広田の言葉が再び浮かんで来た。広田は宮城に「絶対に、どんな形でもお金を渡したら駄目である」と幾度も念

を押したのである。恐らく宮城の心の弱さ、世間知らずをおもんばかつてのことだった。

「優二君、私はもう年金生活者である。それに短大の報酬なんて雀の涙程なんだ。君に貸すほどのお金はないよ。このことはもう二度と話には出さないでくれ」

二人の間に居心地の悪い沈黙が続いた。耐えられなくなった宮城は、「折角だから寿司を食べたら」と促した。

しかし、優二は苦虫を噛みつぶしたような表情を崩さず、無言のままであった。宮城はジョッキに三分の一ほど残ったビールを音を立ててすすめるように飲み込んだ。

「やっぱり教師なんて信用できないな。いつだつてうまいこと、きれいなことを言うがやっていることと言っていることは大違いだよ。とにかくこのことはまだ終わってはいないからね」

そう言い捨てると優二は立ち上がり、音を立てて出て行った。宮城はテーブルに両肘を付け、手で顎を押さえたまましばらく目を瞑っていた。そして、優二の言葉を幾度も反芻した。言いしれぬ空しさが彼を襲った。

宮城は電車を使わずバスで帰宅することにした。バスだと終点から自宅まで小一時間ほど歩くことになる。その時間が欲しかったのである。空を見上げると薄い月が雲の切れ間に浮いていた。ようやく明日は秋空が見られると、宮

城は心が少し軽くなるような気がした。もう秋だ、と宮城は心の中でつぶやいた。

大きな病院に隣接して保育園がある。十日ほど前だった。金網越しに園児の遊ぶ姿が見えた。砂遊びや鉄棒やかけっこなどそれぞれが自由気ままに行動しているように宮城には見えた。二、三歳児ぐらいの子たちが裸足で遊んでいる園の方針なのだろう。いい光景だと宮城は思った。歩を止めて金網越しに園児たちの様子を見てると四、五人ほど子どもたちが寄って来て金網にすがって宮城を見ている。

「裸足で元氣だね。足は痛くないの」と問うと、一斉に「痛くないよ」と答えた。「そうか、元氣でいいね」と話し、離れた。宮城にはこの園児たちの無邪気さが、正直さがうらやましいと単純には思えなかった。人の育ちは真つ直ぐではないことは誰もが分かっていることである。そうとしても人の幸、不幸とはどこで誰が決めるのであろうか。はたまた本人なのであろうか。誰も幸福を願いながら、しかし誰もが幸福にはなれない現実がある。それは行き着くところ個人の努力、あるいは運に帰着することなのだろうか。

もう暗い園舎は静まり返っていた。園庭には勿論子どもたちの姿はない。だが、なんとなく昼間の園児たちの甲高い声が聞こえるような気がした。優二にもしこのような保育園に通うような幼児期があったらいまのような境遇には

ならなかったらとうと、宮城はふと思った。優二や彼の兄妹たちが無性に哀れに思えた。そして、改めて先程の別れ方でよかったのかと思ひ返した。だが、とも思う。彼らは宮城が考えるほどに不幸だとは思ってないかもしれない。その生命力のなせる業とも言える。他人が思うほど彼らは不幸でもなく弱くもないはずである。裸足で園庭を飛び跳ねる子どもたちの足裏のように日々強くなっているかもしれないのだ。悲観したり哀れみを持つことは、その者の傲りかも知れないのである。

長いこと教師を続けて来た宮城は常に「先生」と呼ばれることに違和感を持たず、先生という響きに尊大さを植え付けられてきたのかもしれない。優二の「教師なんて信用できない」という言葉に宮城は腹を立ててはならないと思つた。

保育園からしばらく歩く専用歩道になる。ここは昔、畑地感概用水であった。今は歩道として整備されて、植栽もされて格好の散歩道ともなっている。近隣の住民が何ヶ月に一回は総出で草刈りやゴミ拾いなどの整備を行っている。その道の一面に真つ赤な花が咲いていて夜目にもはつきりと見えた。茎が地面から直立し、十数本固まって咲いている。その花に、今は、葉がない。葉は花が落ちてから出てくる。めずらしい花である。花の形は、両手を手首のとき

ろで合わせ指を広げ輪にしたようである。花びらは針形、深紅にわずかな黄色が溶けているような色である。秋の混じりけのない光線を全て吸収したような色にも見る。彼岸花、別名マンジュシャゲとも言う。白い彼岸花もあることを知ったのはずいぶんと年齢が行つてからのことであつた。「ここにも彼岸花があつた」。そうつぶやきながら宮城はまじまじと花を見つめた。

宮城が子どもの頃には、墓地や土手などあちこちに群生して咲いていたのをよく見た。固まって咲いているものだから遠目には小さな赤い絨毯が広がっているようにも見た。しかし、その赤色が毒々しくも見た。また、よく畑や田んぼの一面の墓地に咲いていたものだから「墓の死人の血を吸つて赤くなっているんだ」と子どもたち同士では言い合つていた。毒々しさと不吉さがあいまつってか、子どもたちはその花を見ると、まるで親の敵にでも出会ったかのやうに憎み、ののしつたものであつた。その上、それらの花を棒で薙ぎ倒したり、足蹴にしたりした。今にして「罪深いことをしてしまつた」と思うのである。後にこの花には有毒成分があるということを知つた。その昔、私たち子どもたちはひよつとしたらそのことを聞き知つていて残酷な行爲をしたのかもしれない。

ここに咲いている彼岸花はどこも傷ついてはいない。宮城の子どもの頃のような者は誰もいないのだろう。地面か

ら黄緑の茎が屹立している様は毅然とした風格さえ感じさせる。花の絶妙な輪は造化の妙を見る思いである。しかし、過去のまがまがしい思いを引きずっているのか、やはり好きにはなれなかつた。何か人工的な気がしてならなかつたのだ。

宮城はその彼岸花を眺めながら、実は誰もが毒を内に持つているのだということに気づいた。「この自分にも」と。

これらの彼岸花のように毒を美しい朱色で覆い隠すものもある。下手な生き方ですぐに露見させる者もいる。あるいは、宮城のように気づかず過ぎて来ている者も数多いだろう。優二を責めてはみたが、それがどれほどのことかと宮城は自分に問い返すのだった。優二は彼自身の責任によることなくあたかも強い圧力によつて社会の片隅に押し込まれ汲々として命を繋いでいる。命を繋ぐためには例え非道でも、その非道しかなければ選択をせざるを得ない。安全地帯、高見にいる者たちが彼を批判することはいかにもたやすい。しかも、それを大声で叫べば叫ぶほど自己満足感が満たされる。場合によつては大向こうからの喝采を浴びる。強気の者にとつては弱者の存在が不可欠なのだろう。弱者がいて自らの存在を強化されるからだ。

優二がこれから金に困つてくることは目に見えている。組織の名を騙つて金などを巻き上げたりする行為は、その組織

の者たちが絶対に見逃すはずはない。肉体的な制裁は勿論のこと、金銭のことも話の中に出てくるだろう。彼の収入は彼の生活を維持するのに精一杯であるはずである。例えほんのわずかな時期であったとしても優二は宮城の教え子であった。優二の先を考えるときすがに宮城は忍びなかった。かと言ってお金を渡すことは絶対に避けなければならぬ。何か方法があるに違いないと頭の芯を絞るようにして考えを巡らした。目を閉じ集中した。ぱっと目を開けた途端一瞬の暗黒の後に彼岸花の朱が目に飛び込んで来た。

「そうだ毒には毒だ」

宮城の視界が急に明るくなった。

「一か八か彼に頼んでみよう」

彼とはやはり宮城の教え子である。彼が三十代前半の頃担任をした。優二同様、児童施設から通学していた。彼が二十代の頃街でばったり会った。彼から「先生」と話し掛けてきたのだ。宮城は話をしているうちに彼が小学三年生の顔と姿がありありと眼前に浮かんで来たのだ。宮城は懐かしくなり、お茶などを飲みながら三十分ほど過ごしたことがあった。けばけばしい服装と指に太い金の指輪をしていた。まともな仕事はしていないと推測された。仕事を尋ねると、ある組織の幹部になっていると答えた。宮城と同じ県内の南部の都市に住んでいると言う。関わりは持たない方がいいだろうと思った。別れ際に彼は「先生、何

か面倒ごとがあったら連絡くださいよ。先生には随分可愛がってもらいましたから恩返しをしたいんですよ」と言つて、握手をしてくれた。そのことを突然思い出したのである。まるで天の啓示のようだ、と宮城は思った。それに従って「駄目元で優二のことを頼んでみよう」と思った。「藪から棒」のことでけんもほろろに断られるのが落ちかもしれないが、やってみようと思つた。宮城は決心した。

中学生らしき四、五人の男の子たちが自転車で宮城の傍らを通り過ぎて行った。部活の帰りなのだろう。何が楽しいか定かではなかったが、彼らたちの明るい笑い声が、彼らが過ぎ去った後にも漂っていた。それに惹かれるように宮城の口元がほころんだ。自宅までの距離は後二十分、宮城は足が少し軽くなったように思えた。